

2026年度 名古屋大学 前期 世界史

問題Ⅰ

19世紀後半以降、イギリスはその工業生産力と軍事力を背景に、どの国とも同盟を組まない「光栄ある孤立」政策をとってきた。しかしインドを植民地としていたイギリスは、イランや中央アジアで南下を強化するロシアと対立を深めていった。義和団戦争後、ロシアは満洲を占領し極東への勢力拡大をはかったが、これを警戒したイギリスは、満洲や朝鮮でロシアと対立していた日本と日英同盟を結び、「光栄ある孤立」政策を放棄した。日露戦争が勃発すると、露仏同盟を結んでいたフランスはロシアを支持するも、イギリスとの対立回避のため英仏協商を結んだ。戦後、日露協約が結ばれて両国関係が改善されたことと、ドイツの中東進出への対抗から英露協商が結ばれた結果、三国協商が完成し、ドイツ、オーストリア、イタリアから成る三国同盟との対立が強まった。(350字)

問題Ⅱ

問1

アケメネス朝に対するミレトスの反乱を機に始まったペルシア戦争では、アテネがマラトンの戦い、サラミス海戦に勝利をおさめ、プラタイアの戦いではスパルタと連合してアケメネス朝を撃破した。その後アケメネス朝の再攻に備えてデロス同盟を結成してその盟主となり、事実上加盟ポリスを支配した。

問2

圧倒的な軍事力と経済力を有していたアテネは、小国に対して高圧的に接し、他国からの支配を恐れて支配を拡大し続けた。しかし、そのアテネがシチリア遠征で甚大な被害を被り、ペロポネソス戦争に敗北して弱者となったことを描いているため。

問3

覇権国家による過酷な支配や際限のない拡大への野心が、周辺国家の反発や抵抗を招き、これが戦争に発展して結果的に双方に甚大な被害が生じる。このように今日の勝者が明日の敗者となるという現在にも通じる情け容赦のない末路について、トゥキュディデスは批判的な歴史叙述によって伝えているため。

問題Ⅲ

問1

- ア) 冊封
- イ) 周辺国の君主を冊封することで、皇帝の徳が中華世界以外にも広がることを示し、中国を中心とした華夷秩序の構築・維持を図る。

問2

- ア) 外戚
- イ) 皇帝が幼少や病弱、暗愚な場合、皇后や皇太后の親族などの外戚が後見人として、政治に介入し実権を握った。
- ウ) 王莽
- エ) 新

2026 年度 名古屋大学 前期 世界史

問3

- ア) 国家の財源を確保するため、荒地を国有化し、そこに流民や兵士を集団で送り込んで耕作させ、租税を徴収する制度。
- イ) 蛮夷の王侯は和解のために送った漢の使者を軽んじ、また漢を恐れてもおらず、すぐに命令を無視して争いを始めてしまうため。

問4

- ア) 漢の武帝
- イ) 中国西北 敦煌郡

問5

武帝時代の積極的な対外進出により生じた財政難のため、武帝の死後は対外消極策に転じ、辺境地域の領土維持や異民族の懐柔が困難となったため。

問題IV

問1

- a 乾隆 b チャクリ c 阮福瑛

問2

- 1 エーヤワディー (イラワディ) 2 チャオプラヤ 3 メコン

問3

- 都 北京 宮城 紫禁城

問4

上座部仏教

問5

モン人

問6

18世紀に入り中国での政治状況が落ち着き、経済活動も活性化すると、中国商人が東南アジアに商品を買付けに来るようになった。ビルマはコンバウン朝が清の侵攻後に清に朝貢し、その後はエーヤワディー川中央平原で中国向けの綿花の栽培を進めた。タイも清に朝貢し、ラタナコーシン朝の時代にはチャオプラヤ川流域で中国向けの米を生産した。ベトナムでは華人が阮朝建国を支援し、清が阮朝を冊封した。その後ベトナムからメコンデルタの米が中国へ盛んに輸出されるようになるなど、東南アジア諸国では各地の産物を求めて来訪した中国商人との交易により経済が活性化した。